

# ぼくはナポレオンを見た

井 村 実名子

## 1. 皇帝の弟の写真を見ること

ロラン・バルトはナポレオンの一番若い弟ジェロームの写真を見たときの印象をこう述べている。

いつだったか、ずいぶん昔になるが、私はたまたまナポレオンの末弟ジェロームの一枚の写真(1852)に遭遇した。そのとき私はある驚きを感じて、こう独りごちた。「皇帝を見た目が見えるぞ」と。この驚きはその後も少しも減ることはなく、私はときどき人に話してみたのだが、誰も共感するふうもなく、理解さえ得られないようだったので(人生とはこんな具合に数々の小さな孤独によって織りなされる)、私も忘れてしまった。「写真」にたいする私の関心は、より文化的な方向をとった。

(『明るい部屋』)

ナポレオン(1769-1821)の家族の写真を見た驚き、皇帝を見た人の瞳を見たと思ったときのふしぎな感覚、これはもはや現代人の共感を呼ばないものらしい。バルトが感じた「小さな孤独」とはなにか。「皇帝を見る」ことの希少価値などはもう誰も問題にしないばかりか、ベンヤミンが看破したように、人間の「まなざしに内在する、自分が見つめるものから見つめ返されたいという期待」、言い換えれば「アウラを知覚する能力」(「ボードレールにおけるいくつかのモチーフについて」)がいつのまにか衰亡したのだ。眼球は鏡のようなものだから、ジェロームの写真は彼の網膜に刻まれた偉大なヒーローのイメージを映し、その写真を見る人の瞳もまた、二百年の歳月を越えて、英雄の遠い影を感知できるのではないだろうか。バルトは平板な「偽りの」社会を生んだ写真イメージの過度の消費状況を憂い、写真が原初の絶対的リ

アリズムに帰るべきことを暗示してこの魅惑的な《遺作》を結んでいる。『明るい部屋』は失われた「写真の恍惚」の復権を希求する懐旧の書である。

公式には1839年に誕生した写真機（ダゲレオタイプ）は、1821年に流刑の島で没したナポレオンも32年にウィーンで夭折したその息子も撮影できなかった。1840年代前半に他界した三人の兄弟ジョゼフ、リュシアン、ルイにも写真は存在しない。元ウェストファリア王ジェローム（1784-1860）は長生きして、甥のナポレオン三世にセント・ヘレナ勲章を授与される荣誉に浴した。皇帝の兄弟姉妹のなかで後世に写真肖像を残したのはこの人だけだ。

なぜナダールら初期の写真家の人物肖像（たとえばネルヴァル、ドラクロワ）が異様に強烈な印象を与えるのだろうか。これまたベンヤミンが示唆したことだが、写される人が長い露光時間に耐えてじっと精神を集中し、視線を返さない不気味な機械を凝視したからにちがいない。簡便な「写るんです」のスナップ写真とは視線の《真剣さ》が違うのだ。写真屋が《修正》の技術を覚え、人工的な背景を演出しだすと、揺籃期の写真から発散されるあの厳しいアウラは消えた。「そもそもアウラとは何か。空間と時間の織りなす不可思議な織物である。すなわち、どれほど近くにであれ、ある遠さが一回的に現れているものである」（ベンヤミン「写真小史」）。近代科学は飽くことなく時空の短縮を推進してきた以上、アウラの喪失は人類の宿命であった。「アウラの消滅」の後、それにとって代わって出現するものが「等距離性」と「再現性」なのである（これは松浦寿輝氏の斬新な現代イメージ論『平面論—1880年代西欧』の一節である）。

私の視点は1880年よりさらに半世紀を遡行する。主題は文学における「見ること」の意味であるが、当時の人々を驚嘆させた写真機によるイメージ革新もこのテーマに無縁ではない。

## 2. 二世紀前の英雄像

ダヴィッド、グロ、ジェラール、アングルらの描いた肖像画や戦争画の威風堂々たるナポレオン像はよく知られている。どれだけの同時代人がこれら

の絵を見ただろうか。展示された場所でしか見られなかったのだ。皇帝その人の周辺にいたごく限られた側近や参謀を除いて、一般大衆は彼の顔立ちも声もほとんど知る機会を持たなかったであろう。肖像画の複製版画、民衆に流布したエピナル版画、カリカチュア（風刺漫画）など、視覚的メディアの媒体は存在したが、その伝播力も写実性も現代のマスメディアの威力とはもちろん比較にならない。マルメゾンでアンチ・ナポレオン戯画展を見て、私はどの顔も体つきも似ていることに妙に感心した。これはコピーがコピーを生む現象で説明できる。ドラクロワはスタプフェル仏訳『ファウスト』（1828）の連作石版画挿絵に見事なゲーテの肖像を添えた。ワイマルの文豪に会ったこともない画家にどうしてこれが描けたのだろう。当時出まわっていた肖像版画を参考にしたのだ。

言うまでもなく、画家は、たとえカメラのように細密に具象を写す技量の持ち主であれ、対象に隷属はしない。現実のモデルは彼の必須条件でないが、写真の被写体は現にそこに実在するものである。写真は「ある瞬間にそれがそこに存在した」ことを立証する記録資料としては絵画に勝ることは否めない。ダヴィッドは例の大作『戴冠式』（1807）に参列したお歴々の衣装や表情まできわめてリアルに再現した。だが彼は嫁を嫌って姿を見せなかった皇帝の母レティツィア、病気で欠席したカブララ枢機卿を政治的配慮から加筆した。画面の構図のために排除された参列者も多い（鈴木杜幾子『画家ダヴィッド』）。写真機は原則としてそんなインチキはしない。

そのうえ一般に美化して描かれる肖像画は本人に似ているとはかぎらない。だから「肖像画に似ているか」という質問が成り立つのだ。皇帝の似顔絵はかなり広く流布していたにせよ、結局のところ、怪しく疑わしいイメージにすぎない。要するに、世界を震撼させた名声赫赫たるスーパー・ヒーローといえども、本人に近づいて見る以外には彼のイメージを知る術はなかったのである。

わずか二百年のあいだに科学はまさしく魔法のような驚異を実現した。パラッチと呼ばれる《映像泥棒》に追跡されて非業の死をとげたプリンセス

の葬儀に、「BBC はテレビカメラ 100 台、中継車 22 両を出し、178 カ国に同時中継、世界中の約二十五億人、英国だけでも人口の約四割（二千五百万人）がこれを見た」（97 年 9 月 7 日、朝日新聞）。文明社会はこの錯乱的に肥大した映像情報に全面的に侵食されている。

ナポレオンは独りでセント＝ヘレナを脱出し、目立たぬ漁船で働きながら西欧に戻ることもできた（という愉快的小説を最近読んだ。シモン・レイス『ナポレオンの死』）。彼はある秘密組織の陰謀に乗せられて、よく似た替え玉を残して海老捕獲船に乗りこみ、アントウェルペンに上陸、ブリュッセルからパリに着き、ボナパルチストの寡婦と懇ろになる。彼女のメロン商売を成功させ、ついに《本当の秘密》を打ち明けると、女は愛する男の発狂を悲しみ精神科医を呼んでくる。肺炎の高熱にうなされて、思わず「わたしの名前は？」とつぶやく男の耳元にやさしい女は「あなたは私のナポレオンよ」とささやく。戦場に昇る輝かしい太陽の幻覚に酔い痴れて、ナポレオンは名もない凡人として幸せに死んでゆく。

この小説では変装もしない「かの人」を誰ひとり見破らない。どこことなく似ているので「ナポレオン」というあだ名で呼ばれても、ばれる危険はなかった。驚くにはあたらない。民衆は彼の名声を知ってただけで、容貌は知らなかったのだ。ワーテルロー見学ツアーに参加したナポレオンは、あの最後の決戦で片足と片目を失ったと称する偽の元近衛兵の観光ガイドに会う。嘘八百を並べるこのいかさま師に彼は鋭く問う。「きみは一度でも皇帝を近くから見たことがあるのかね」。「もちろんよ。今あんたを見ているように近くからだ」。「見た」というかくも簡単な嘘が誇るに足る価値を主張できた時代、それは「見ること」が一期一会の尊い賜物だったからだ。

### 3. 同時代のドイツ人の見た皇帝

ヘーゲル(1770-1831)はナポレオンのイエナ入城を目撃した日（1806 年 10 月 13 日）の真夜中に『精神現象学』を脱稿したとある書簡で述べた。皇帝はその翌日イエナ郊外でプロイセン軍に勝利する。しかしながら、ヘーゲ

ル伝の著者フィッシャーによれば、これはドラマチックな粉飾であって事実ではないという。ヘーゲルがフランス部隊の焚くキャンプ・ファイヤーを窓から眺めたとき、最後の部分はまだ未完であった。バンベルクに原稿を発送するのは10月20日だそうだが、それはまあどうでもよい。36歳の哲学者が稀なる感動をもって馬上の英雄の英姿を見たことに注目しよう。

皇帝、この<sup>ヴェルトゼーレ</sup>世界精神が街を通り、偵察騎行に出かけるのを私は見ました。——じっさい不思議な感じです。ここで馬上にあって一点に集中されながら世界のうえにおおいかぶさって支配している、こういう個人を見るというのは、木曜から月曜にかけてのあんな進撃は、この特別非凡な男にだけ可能なことです。この人に驚嘆しないというのは不可能です [10月13日、ニートハンマー宛書簡]。

(フィッシャー/玉井・磯江訳『ヘーゲルの生涯』)

翌10月14日、イエナ=アウエルシュテットの砲声はゲーテ(1749-1832)の住むワイマルまで響いた。ほどなく空腹をかかえたフランス兵が町になだれこみ、略奪をはじめ、ゲーテ家の人々もあやうく被害にあうところだった。ゲーテがナポレオンに謁見するのはその二年後である(1808年10月2日)。エルフルトでフランス=ロシア両皇帝会談が持たれたとき、ナポレオンはドイツの著名な文学者ゲーテとヴィーラントの接見を所望した。『若きウェルテルの悩み』を七回読んだという皇帝はその感想をゲーテに語り、歓談は一時間ばかり続いた。数日後にゲーテはワイマルでさらに二度皇帝に会った。二人の巨星の邂逅については、その場に居合わせたタレーランの回想記もあるが、ゲーテ自身も手記を残した。59歳の文豪の気品高い風貌に接したナポレオンは、「これこそ男だ」と感嘆し、<sup>ヴォワラ・アン・ノム</sup>レジョン・ドヌール勲章を授与したという。

ゲーテは晩年の弟子エッカーマンに何度かこのときの思い出を語った。あるときエッカーマンは、ロシアに赴任する途上にワイマルに立ち寄ったウェリントン公を偶然見かけたと告げる。老詩人は大いに関心を示し、どんな印

象だったか、肖像画に似ていたか、などと熱心にたずねる。肖像よりもはるかに立派で非凡な顔立ち、生き生きと輝く眼光に強靱な精神を見たとき弟子は答えた。ゲーテは深くうなずき、「君はまた英雄を一人見たというわけだ。それはそれなりに大したことだ」という。

私たちは、ナポレオンのことを話し、私は彼を見なかったことを残念がった。「もちろん」とゲーテは言った、「それも見ただけの値打ちがあったよ。——世界を一身に集めたわけだからな！」——「風貌も相当なものだったでしょうね」と私はたずねた。——「その通りだったよ」とゲーテは答えた、「見ただけで、そうだということがわかったな。これは大したことだったよ」。

（山下肇訳『ゲーテとの対話』、1826年2月16日）

ヘーゲルは「世界精神」と呼び、ゲーテは「世界を一身に集めた」と評するこの人物、彼を「見た」感激を二人はまるで憧れの大スターに会った少年のように語っている。彼らを魅惑したのは、ナポレオンの容姿や態度ではなからう（ヘーゲルはそこまでは見ていない）。会えるとは予想もしなかった英雄を近くで見る、そのこと自体が恍惚の瞬間なのだ。現代の誰が名高い人との出会いにこれほど純粋な驚きと感銘を表明するだろうか。会うことは簡単だし、有名人の顔はしばしば写真やテレビで知れわたっているのだから。

目新しい逆説ではないが、豊かな映像文化を満喫できる幸せな現代人は、不幸なことに「見ること」の驚きと発見の喜びを奪われている。私たちの知覚は、写真、映画、テレビ、ビデオ、パソコンなど、あらゆる華美な情報と映像の洪水に慣れきって、気づかぬうちに麻痺しかけてはいないか。ヒマラヤの頂上の雪景色、色とりどりの熱帯魚の泳ぐ海底、オリエン特急の車窓の眺め、顕微鏡の世界、火星の地表、——どんな遠いものも、普通は見えるはずのないものまで、自宅のソファにねそべって見られる。気に入ればコピーして、何度でも反復できる。この驚くべき日常を誰も異常とは感じてい

ない様子に私は驚く。鮮明かつ精密なイメージの迫真性は《実物》を凌駕し、《実物》の価値を低下させる。たとえば暗い教会の天井画は画集を眺めるほうがはるかに判りやすい。すべてが既知のイメージの再認識にすぎないならば、予期しない新鮮な感激は期待できない。驚嘆に値する現実、未知との遭遇のチャンスは加速度的に減少している。無知の特権である逞しい想像力、果敢な冒険精神、見えない夢を追う心も衰退する。二、三世紀前の人間の視覚的欲望をもはや共有できない私たちは彼らの感じた歓喜も恐怖も理解しないのかもしれない。

いつの時代でも、自分の肉眼で《本物》を見たいという人間の欲望は根源的なものだった。その強度は夢の実現可能性に比例もすれば反比例もする。可能性のない時代にはあきらめが優先する。「遠いものを見に行きたい」という実践的願望は交通手段の発達とともに大衆化した。蒸気船や鉄道が移動を容易にした 19 世紀前半期に芽生えた新しい知の欲望が「見ること」であった。写真機の発明も同じ時代の産物だった。それ以後、19 世紀後半から今日までの流通と通信の進歩は目も眩むばかりだ。電信電話、海底ケーブル、自動車、飛行機、新幹線、コンピューター通信、ファックス、衛星中継。1821 年 5 月 5 日のナポレオン死去のニュースが西欧で報じられたのはその 2 カ月後であった。何という遠さ！ 今ではすべてが等しく近いのだ。

#### 4. 皇帝を「見た」子供の世代

シャトーブリアン(1768-1848)、スタール夫人(1766-1817)、バンジャマン・コンスタン(1767-1830)の生涯にはじかにナポレオンに接する機会があった。私はこれらの作家たちと皇帝との関わりを述べたいのではない。皇帝と面識のあった大勢の人の回想録を掘りおこすつもりもない。ラス・カーズの『セント=ヘレナ日記』(1823)に端を発し、40 年 12 月 15 日の「遺骸の帰還」で頂点を極めるナポレオン伝説形成の研究でもない(これは一巻の書物をもってしても論じきれないほど巨大なテーマだ)。この小論の目的は、「私は見た」という言説の歴史的コンテクストを読むことにある。その視覚的

対象を仮にナポレオンとしよう。そして『世紀児の告白』(1836)の作者ミュッセが規定した「大革命の孫、帝政の子供」の世代に属する作家たちが幼少のころに「見た」皇帝に焦点を絞ってみよう。俎上にのぼすのはユゴー(1802-85)、デュマ(1802-70)、サント=ブーヴ(1804-69)、ネルヴァル(1808-55)、——ナポレオン時代に生まれ、王政復古期にロマン派文壇に登場し、七月王政から第二帝政まで(ユゴーはさらに長く)文筆活動をした作家たちである。

#### 4-1. 将軍の息子ヴィクトル・ユゴー

ナンシーの大工職人の子レオポル・ユゴー(1773~1828)は、ネルヴァルの父エチエンヌ・ラブリュニー(1776-1859)と同じように、革命志願兵から出発した。ドイツ、イタリアなどを転々とした後に、スペイン王ジョゼフに見込まれて将軍に、スペインでの勲功により伯爵になった(1810)。軍隊で平民がこれほど高い地位に昇ることは、ナポレオン以前には不可能だった。オーギュロー、ランヌ、ネーに匹敵する出世頭といえよう。レオポルはヴァンデの反革命暴動の鎮圧に派遣されて王党派の娘ソフィを知り、97年にパリで結婚、三人の息子を得るが、仲の悪い夫と妻はそれぞれ恋人を持ち、三男ヴィクトルの誕生後はほぼ別居状態であった。子供らは母ソフィを頼りにし、不在の父をほとんど知らずに成長する。母の愛人ラオリー将軍は反ナポレオン陰謀事件に連座して処刑され(1812)、彼女は激しく皇帝を憎んだ。そんな母の感化のもとでヴィクトルは王党派詩人としてデビューする。帝政崩壊後の将軍は愛人とともにブロワに引退して《文学》に専念、回想録や小説を執筆した。息子たちと父親が親しい家族関係に入るのは母の死後(1821)のことだ。

処女詩集『オードとバラード』(1822)にヴィクトルは皇帝の死を歓迎する詩篇「ブオナパルテ」を載せたが、次第に母の支配を脱却し、革命と帝政に奉仕した父の側に傾きはじめる。「わが父に」(1823)は、「わが父よ! 詩人は戦士たちに忠実だ」と、ナポレオンの不滅の栄光を支えた果敢な兵士たちと



レオポル將軍の勲功を讃え、「エトワールの凱旋門に寄せて」(1823)、「二つの島」(1825)へと皇帝賛歌は調子をあげる。こうして両親の血のイデオロギー的葛藤を克服したユゴーは自由派ボナパルチストに転身する。リベラリズム陣営への明白な転向宣言が「ヴァンドーム広場の記念柱に寄せるオード」(1827)である。その祖国愛の旋律は前年に18歳のジェラルム(ド・ネルヴァル)が出版した『ナポレオンと戦うフランス』に通ずるものである。

ユゴーは二つの詩篇で「皇帝を見た」情景を回想した。ひとつは詩集『秋の木の実』所載の「幼年時代の思い出」(1831年11月の日付)であるが、これはユゴー將軍が仕えた主君ジョゼフ王(シュルヴィリエ伯)に献呈されている。

ある日、パンテオンで行われた大きな祝典の折りに、  
私は7歳だったが、ナポレオンの通るのを見た。  
その名も高い威厳にみちた彼の姿を見るために、  
私は母なる翼を抜け出していた。  
というのも皇帝はすでに私の心を不安にしていたのだ。  
しかしやさしい眼差しをもつ母はしばしば怯えた。  
私が戦争、襲撃、会戦を語るのを耳にして、  
私の身の丈を案じ、私のために群衆を恐れた。

賑やかなファンファーレに迎えられて人々のまえに現れた皇帝の「無言で重厚な」様子に少年は驚く。その翌日、散歩に出た將軍と幼い息子はパリの町を見晴らす小高い丘に立って夕陽を眺める。「ねえ、お父さん、ぼくらの皇帝は、どうしてあんな冷たい眼差しで、じっと動かずにいるのだろうか。神から遣わされたあの人、すべてを動かし、すべてを炎に投じるあの人が」。そうたずねる少年に將軍は答えて言う。冷徹な表情のかげに皇帝は思考している、明敏な頭脳の奥には、栄光あるフランスが全欧州を支配するための戦争計画と輝かしい未来の夢が芽生えているのだ、と。

ヴィクトルは当然、父レオポルの『回想録』を読んだ。この著書で將軍は

皇帝との親しい出会いを語っている。1808年、皇帝が兄ジョゼフ王に会いにスペインに来たとき、ユゴー将軍は皇帝を出迎えてジョゼフ王の書簡を手渡し、短い会話を交わした。皇帝のそっけない口調、刺すような鋭い眼光にレオポルは好感を持たなかった（『アデール・ユゴーの語るヴィクトル・ユゴー』）。「幼年時代の思い出」の詩人は父親の『回想録』を下敷きにしたのだ。7歳の少年の見た皇帝の冷たい様子は、明らかにレオポルの書き留めた印象に一致する。詩人はその寡黙な表情の意味を観念的に解釈し、父親の単純な印象記から「夢みる思索家ナポレオン」という神秘めかした英雄像を造形している。

伝記的な信憑性はどうみても低い。1809～10年にパンテオンで皇帝が臨席した大きな祝祭の開催はなかったと注解者のアルブイは言う。ユゴー将軍はこの頃、スペインでゲリラと闘っており、パリに居るはずがない。もっとも親子がその後皇帝の偉大さを語りあったことはありえよう。ヴィクトルが実際どこかで皇帝を見かけた可能性もないではない。

さらに同じ詩の後半部に、ユゴーはもう一度皇帝の姿に接し、父の言葉の正しさを確認する。

年経てまた別のときに、この人の通るのを私は見た、  
パリにあってローマにおけるカエサルにもまさる偉大な彼を。  
そのとき私は父の言葉を思い出した。  
その人はほとんど神に等しい名誉に包まれていた。  
そして私は、通りすぎるその人の夢見る姿に  
同じ思索と同じ顔を見いだした。  
彼は相変わらず超人的な企画を練っていた。  
百に近い鷲の軍旗がローマ皇帝のように彼を護送した。

もうひとつの作品は詩集『黄昏の歌』（1835）の一篇で、ヴァンドームの記念柱落成式（1810年8月15日）で皇帝に喝采した子供の思い出である。今度は7歳でなく6歳である。

ぼくたち6歳の子供たちは、あなたの通る道に整列し、  
随行の列のなかに誇り高い面差しの父を探しながら  
あなたに拍手を送ったのだ。

「記念柱に寄せる」

ところが、この当日、ヴァンドーム広場では儀式も行進もなく、皇帝はチュイルリー宮を出なかったという。詩人の妻アデルが亡命先で息子やオーギュスト・ヴァックリーに助けられながら綴ったユゴー伝（1863年刊）も詩人が幼いころに皇帝を見たことには一言も触れていない。《父とともに皇帝を拝した情景》は詩人の夢であろう。「幼年時代の思い出」のやさしい母と勇敢な父の愛に包まれた親密な家庭の雰囲気はすでに詩的虚構である。6,7歳のヴィクトルの実生活に父レオポルド将軍の影は希薄であった。

注目すべき第一の特徴は、父の遺志を継ぐ息子という二世代の継承性である。革命の子ナポレオンは《民衆の父》であった。そしてカエサルやシャルルマーニュに比較される征服者の思い出と結びつく好戦的なフランス中華思想の原型が見てとれる。「ナポレオン伝説は国民的な規模におけるイデオロギー闘争の一形態であり」、それはまた「ナショナリズムとして機能した」と説く西川長夫氏の論文は説得的である（『フランスの近代とボナパルティズム』）。

バルザックやヴィニエの小説も無視できないが、ユゴーほどナポレオン神話の宣伝に寄与した詩人はいない。こうした文学の強烈な波紋が集团的心性に絶大な感化を及ぼした。1851年12月2日のクーデターはその具体的な成果であった。支持した皇帝の甥ルイ・ナポレオンに裏切られたユゴーは亡命の島で自分の蒔いた悪い種を刈りとらねばならなかった。重要な詩篇「贖罪」（1852）で複雑な屈折を見せる彼のナポレオン観の変容については、上記の西川氏の名著に明快な分析があることを言い添える。

#### 4-2. ヴィレル＝コトレの少年アレクサンドル

アレクサンドル・デュマの父親（1762-1806）も軍人だった。サント・ドミ

ンゴ島（ハイチ）で生まれ、父親（デュマの祖父）はフランス人だが、母親は島の黒人奴隷であった。この祖父は豪快な放蕩貴族で、現地妻と子供らを奴隷として売り払って帰国、売られた子トマ・アレクサンドルは、14歳のとき父を慕ってフランスに渡り、母の姓デュマの名で入隊した。ヴィレル=コトレに駐屯中に知り合った旅籠屋の娘を娶り、イタリア、エジプト戦役に参加、エジプトでは共和主義の立場から主君ナポレオンを批判して寵を失い、晩年は不遇だった。胃癌のため44歳の生涯を終えたとき、息子のアレクサンドルは4歳にもなっていない。二人の幼児をかかえて困窮したデュマ未亡人は、皇帝に年金給付を請願したが無視され、一家は冷酷な皇帝の仕打ちを恨んだ。そのデュマもまた、12歳のときワーテルローの決戦に出陣する皇帝を見た感激をある旅の覚書に綴った。『ライン河畔周遊』（1841）に載るその文章は、38年夏のワーテルロー巡礼報告に付随する思い出の記であるが、デュマは後にこれに手を入れて『わが回想』に収めた。

ヴィレル=コトレはパリ北方約80キロに位置する町である。1815年6月、ベルギー方面に向かう兵士たちが続々と町を通過して行くのを見てアレクサンドル少年は興奮する。やがて6月15日、今日は皇帝が通るという新聞報道に、人々は朝から街道に出て待ちうけた。ようやく三時頃、二台の馬車が姿をあらわした。少年が大急ぎで宿駅に駆けつけると、皇帝の馬車が停まっている。

私はナポレオンを見た！

その人は小さい金モールの肩飾のついた緑色の軍服を着て、レジョンドヌールのオフィシエ勲章をつけていた。私には馬車の窓枠にかこまれた上半身しか見えなかった。

頭を胸のほうに傾けていた。まさしく古代ローマの皇帝のメダルにあるような美しい怪獣だ。額を前に下げて、微動だにしない顔面は蠟のように黄色く、眼球だけが生氣を放っていた。

左の席には皇帝の弟ジェローム、皇帝の正面には副官のルトールが座って

いた。やがて鞭が鳴り、馬のいななきとともに馬車は幻のように消えた。4日後の6月20日、頭や腕に怪我をした三人の男が町に着いた。フランス語もろくに話せないウェストファリア人の逃亡兵だった。町の人たちはワーテルローの敗戦を容易に信じなかったが、続いてやってきたフランス兵が皇帝とジェローム王の戦死を伝えた。夜十時に馬車の音がして、一同が飛び出し、みると、それは皇帝だった。アレクサンドルは石のベンチに乗って母の肩ごしに見た。

まさしくナポレオンだった。同じ軍服を着て、同じ席に座っていた。初めて見たときと同じように、頭を胸に垂れていた。たぶん前より深くうなだれていたが、しかし表情は皺ひとつ変わっていない。この崇高な賭博師は世界を手玉にとった勝負に敗北を喫したばかりだったのだが、それを思わせる変化はまったく見られなかった。ただ馬車にはもうジェローム王もルトールもいなかった。[中略]

ナポレオンはゆっくり顔を上げ、夢からさめたように、まわりを見まわした。そして甲高い声でぶっきらぼうにこう尋ねた。

—ここはどこかね。

—ヴィレル＝コトレでございます、陛下。

—ソワソンから何里きたのか。

—6里でございます、陛下。

—パリまではどのくらいあるのか。

—19里でございます。

—御者に急いで行けといってくれ。

そういうと皇帝は再び座席の角に背をもたせ、胸に頭を垂れた。

馬たちは翼が生えたかのように彼を運び去った。

この二つの出現＝幻のあいだに何が起こったかは、世界の知るところである。

(デュマ『ライン河畔周遊』)

最後の負け戦に赴く皇帝がヴィレル=コトレ、ソワソン、ランの道を通り、また同じ道を帰ったことがたとえ史実であっても、12歳の土地の少年が往路も帰途も宿場に居あわせて、ごく他愛ない会話ながら、皇帝の声まではっきり聞いたとは、驚くべき僥倖ではないか。とはいえ幻のような奇跡の  
アパリション  
出 現はデュマ特有のロマネスクな輝きを放つ。これは通常ノン・フィクションに分類される紀行・回想記であるが、ユゴーの詩の場合と同様に、嘘か真かの詮索は無用であろう。大概の歴史書によれば、6月15日、皇帝の軍隊はシャルルロワ近くのサンプル川を越え、その翌日リニィとカトル・ブラの会戦にのぞんだ。帰路の馬車にルトール將軍の姿がないのは当然だ。彼は17日にシャルルロワで戦死した。18日、ワートルローで決定的な深手を負った《鷲》は、首都に戻り（21日）、二度目の退位（22日）ののちセント=ヘレナに流される。

『わが回想』の語り手デュマは、多くの場合、自ら《歴史》の重要な瞬間に立ち会い、《目撃者》を演じている。《歴史》の真実は「私は見た」という言説によって裏打ちされると彼は信じている。しかしデュマの回想も旅行記も仮想の一人称で書かれた《小説》と考えなければならない。耳にした会話、受け取った手紙の捏造も彼にとっては朝飯前であった。次の世代のマクシム・デュ・カンの《記録文学》にも同じ作法の模倣が見られる。マクシムに善意の嘘をつかせたのは、「証言という名の物語を本当らしく見せるための配慮の体系」であると蓮實重彦氏は論じている（『凡庸な芸術家の肖像』）。

#### 4-3. ブーローニュの閱兵式で皇帝を見た少年

サント=ブーヴ(1804-69)はブーローニュの役人だった父親を誕生前に失い、母親と年老いた伯母の家庭で育った。1798年来、ナポレオンは宿敵英国を睨んで、ノルマンディ沿岸の軍備を進めた。英国上陸作戦は幾度も検討されたが、いずれも実行には至らなかった。1801年、ネルソンの艦隊は二度にわたるブーローニュ港攻撃に失敗した。1803年5月、英国がアミアン条約を破棄し、再び緊張が高まったとき、ナポレオンはブーローニュに赴き、軍

隊を集結させた。1805年には、ランヌ、ネー、スルト、ダヴーの部隊が海岸に待機して出動命令を待った。約40年後にサント=ブーヴは幼いころに感じた英仏対決の印象を次のように回想する。

子供のころ、私は大砲や小型艦隊を目前にする、めったにない皇帝の町ブローニュ=シュル=メールで育ちました。1813年まで、軽騎兵の服を着せられていたのです。あなたはこんなことをたぶんご存じではなかったでしょうね。7歳くらいのとき、その可愛らしい制服姿で、ナポレオンが1812年のロシア遠征に向かうまえに、この海岸にきて行った最後の閲兵式に参列さえしたのですよ。私は英雄から五、六歩という場所にいました。この偉大な人のどんな身振りもどんな閃きもすべてよく覚えています。偉大さについての私の概念はすべてこの時代に関わるものなのです。

(オルタンス・アラール宛書簡, 1845年, 『書簡集』第六巻)

これは私信であって文学作品ではない。女友達に嘘をつく理由もなさそうである。9歳まで小さな軍服を着せられた男の子というのは、軍事独裁国家のもとでは大いにありそうな情景である。ナポレオン失墜後のフランス社会は「偉大さ」の観念を見失ったとする月並みな歴史感覚はサント=ブーヴの独創ではまったくない。

89年には、人は祖国のため、人類のためにすべてのことをやった。帝政時代には光栄のためにすべてのことをやった。つまりその点にこそ、偉大の源があったのだ。現代では、結果が偉大に見える時でさえも、それは利害の観点から作られただけのものである。

(土居寛之訳『月曜閑談』)

大革命からナポレオン失脚までの約25年を作家たちは英雄的な叙事詩の時代と見なした。祖国のため、人類のため、栄光のための献身を賛美するこの観念は、ラ・マルセイエーズを歌いながら革命戦争に結集した年若い《92

年の義勇兵》に源をもつ根強い国民意識である。ロマン派の過激な逸脱を嫌い、政治にも冷静に距離を保ったサント=ブーヴでさえ、「偉大なる祖国フランス」の革命神話を是認しているのである。

20年後にこのシニカルな毒舌家は、ブローニュで一度だけ見かけた皇帝はちょうど小便をしている最中だったとも語った（『ゴンクール日記』、1865年1月2日）。この意地の悪いブラック・ユーモアは第二帝政期の反体制派が巻き返した英雄の脱神話化の動きに呼応するものだろう。複雑な両義性を孕むナポレオン伝説は時代とともに色調を変えた。1845年と1865年では政治的風土が全然違うのだ。

#### 4-4. 二人の皇帝を見た（かもしれない）ネルヴァル

ネルヴァルの父エチエンヌ・ラブリュニーは16歳のとき《92年の義勇兵》を志願した。リール攻防戦で負傷、95年にアリエッタで再び足に重傷、パリに出て医学を修め、1809年今度は軍医として妻同伴でドイツ方面に出征した。赤子のジェラルムは母の故郷の親族に預けられた。その母はポーランドで病没（1810）、軍医はモスクワから敗走の途上、ヴィルナで捕虜となり、1814年まで消息不明、帰還して婦人科の開業医となった。7歳の息子は父親に引き取られ、パリに暮らすことになる。ジェラルムが皇帝を見る機会には「百日天下」しかない。母の愛を知らず父を崇敬する少年はユゴーよりも早く熱烈な共和派ボナパルチズムに染まり、皇帝を哀悼する悲歌やヴィレル反動内閣を攻撃する風刺冊子を出した（1826）。

以下に引くのは、タンブル大通りの大衆演芸小屋を回顧する風俗記事である。シルク・オランピック劇場の戦争スペクタクルで皇帝役を演じた芸人エドモンを思い出すついでに、彼は《本物》の姿も「見ることはできたはずだ」と書いた。

私自身も、まだ若いとはいえ、帝政の臣下として生まれたので、四半世紀のあいだに、二度ナポレオンを見ることはできたはずだ。一度は



《五月の野会》に姿を見せた皇帝を、もう一度はフランコーニ座の默劇で皇帝に扮したエドモン氏を、それは可能だったのだ、許されたのだ。あの英雄とあのペテン師が、私の目のまえで、あんなわずかなあいだに、代変わりしたなんて！ それにしても、なんという夢だろう、人生とは！

（「タンプル大通り、大衆演芸」，1844年5月「アルチスト」誌）

前未来形のこの文章は推量的な不確実さを残す。だが最晩年の『散歩と回想』では、1815年6月1日の式典をはっきり「見た」と述べている。「囚われ人であったフランスの英雄」という表現はすでに帝国凋落の悲哀を漂わせる。7歳の少年は失墜を目前にした皇帝の最後の勇姿に別れを告げたのだ。

フランスに運命の時が鳴った。広大な帝国の胸に抱かれた彼自身囚われ人であったフランスの英雄は《五月の野会》に忠実な勇者の精鋭を集結させようとした。私はその崇高なスペクタクルを将軍たちの席で見た。金の鷲を飾った軍旗が各連隊に授与され、万人の忠誠に委ねられた。

（『散歩と回想』5章）

予定より遅れてシャン・ド・マルス広場で開催されたこの式典で、ナポレオンはバンジャマン・コンスタンに起草させた帝国憲法付帯項目に宣誓し、金の鷲印を戴く軍旗を各連隊長に授与した。この「崇高な光景」を思い浮かべるには、現にヴェルサイユ宮殿の「聖別の間」を飾るダヴィッドの大作『鷲の軍旗の授与』（1810）を眺めるにしくはない。これは1804年の戴冠式直後に行われた同種の軍事祭典を描いている。

ところで、「将軍の席で見た」とはどういうことか。軍医だった父親の存在を連想させる句であるが、1814年6月に軍職を辞め、町医者になったラブリュニー氏はもはやこのような式典に出席する義務はないはずだ。彼は再び皇帝に奉仕するほど「忠実な勇者」ではなかった。単なる好奇心から、7歳の息子を連れて知り合いの将軍の栈敷にもぐりこんだのか。それとも子供だけ

を行かせたのか。伝記的事実との照合は無理のようだ。

将軍を父に持ったユゴーやデュマが皇帝を「見た」のなら、将軍ほど偉くはないが、大<sup>グランド・アルメ</sup>陸軍付軍医の息子だって、同じ世代の証しを提示しなければ面目がたたない——そんな対抗意識がネルヴァルの脳裏にあったのかもしれない。慎ましく遠慮がちにはあるが、彼もまた自由奔放なデュマの語り口を真似ている。『散歩と回想』から読みとるべきは《史実》ではないことは明白である。ネルヴァルの歴史にたいする視線は実証精神とは無縁の象徴的あるいは神話的な物語を志向していた。

ネルヴァルは早く父を失ったユゴーやデュマよりも不利な条件に縛られていた。三度の戦傷にもめげない強健な元軍医は、46歳で首を吊る哀れなジェラルドより4年生きのび、83歳の長寿をまっとうする。気弱な息子は畏怖する父親の目を意識せずには何も書けなかった。波瀾万丈の《歴史》の生き証人である父親の物語を彼は私的な神話体系に組み入れたかったのだが、父の長寿はそれを妨げた。

## 5. 一世代の共有する符牒

ユゴー、デュマ、サント=ブーヴ、ネルヴァルの幼年期の回想にあらわれる皇帝との出会いを総括してみよう。

① 各人とも自分の幼時の思い出と皇帝の生涯との可能な接点を探りあて、個人の宿命と祖国の《歴史》との緊張関係を浮き彫りにしている。皇帝を見た体験は彼らの世代的身分証明の符牒であるかにみえる。個人を越えた集団的な文学現象である。

② ナポレオン叙事詩の重要なモチーフが盛られていること。ユゴーは皇帝の栄誉に喝采するが、ほかの3人は「最後の決別」という英雄の悲劇性を強調している。

③ 官吏の息子サント=ブーヴは別だが、皇帝と命運をともにした父親との心情的な絆の意識が強い（デュマ『わが回想』にも父を思う親愛と賛美の情が綴られている）。

④ どの説話も虚構と記録の境界線が曖昧である。研究者は真偽の追及を好むものだが、それは場違いな好奇心かもしれない。たとえ白黒を確定する証拠が挙がっても、それが問題の本質を変える要素とはならない。説話における《真実》とは、個々の事象の实在性に直結するものではない。この原理を忘れるとき、読者は文学に誤って騙される。

後 20 年を経て故国に帰還した《皇帝の遺骸》の神話的威光が作家たちの想像力を刺激したことは否めないだろうが、それと同時に「見ること」の絶対的な優位という 19 世紀特有の知の磁場を認識しなければならない。「目撃者は語る」の至上論理は、見ないものまで「見た」という嘘を生じさせずにはおかない。真実らしさを補強する楔という面と、近づきがたい対象を見たものにたいする羨望に訴える効果もある。これは実証主義とリアリズムの攻勢に対抗するロマン派文学の詐術であって、回想記・紀行文（記録）の作法も小説（虚構）とほとんど異なるところがない。ヴィニーの小説『軍隊の服従と偉大』（1835）とシャトーブリアンの『墓の彼方の回想』（1848）とどこに相違が認められようか。ネルヴァルは船の寄港しないシテール（セリゴ）の島の見聞記を『東方旅行』に挿入し、聴きそびれた歌劇『ローエングリン』初演の論評にこっそり指揮者リストの覚書を借りた。アムステルダムのレストラン像落成式をまるで見たかのようにレポートした。報道記者は現場に立つべしとするジャーナリズムの要請に従わざるをえなかったのだ。

## 6. 確かに皇帝を見たスタンダールの場合

スタンダール [アンリ・ベール] (1783-1842) はネルヴァルより 25 歳も年長で、ほぼ父親の世代に属する。事実、1809 年のオーストリア戦役で軍医ラブリュニーとベールはリンツで遭遇したかもしれず、二人ともあのベレジナ渡河の惨劇から生還したのだ。ベールは 17 歳のとき親戚の貴族ピエール・ダリュの縁故でナポレオンの第二次イタリア遠征軍の後を追ってミラノに入り騎兵少尉となる (1800)。その後は戦闘員ではなく、陸軍主計官補

(1806), 参議院書記と帝室用度検査官(1810), ロシアでは食料配備, ドイツでは経理(1813)などを担当し, 皇帝の失脚とともに浪人になったときは31歳, 愛するイタリアにあって, 「自由と栄光の失せたあの国には, これから自分もどらないだろう」(15年7月25日の日記)と書いた。

1804年頃のパリ日記は彼がナポレオンを何度か見かけた事実を証明する(チュイルリーで見た馬上のナポレオン, 戴冠式の当日と鷲の軍旗授与式の翌日に見た法王と皇帝など)。しかし「自由」と「平等」の理想を蹂躪した専制君主をベールは許さない。「宗教がやってきて, 専制政治を聖別する」事態を嫌悪し, 観劇する皇帝の鼻と額の平行線を日記帳にデッサンした日には, その顔つきが俳優のピカールに似てかなり下品にみえる, と侮蔑的な感想を添えている。スタンダールの皇帝崇拜の情熱は復古ブルボン政権にたいする反感に触発されたものだが, 1817年にミラノで書きだした未完の「ナポレオン伝」と, 50歳を越えてから綴った「ナポレオンに関する覚書」にも時折彼の批判の目は光っている。

フランス軍のヴェネツィア占領[1797]によって, ナポレオンの生涯のこのうえなく高貴で詩的な部分はおわった。

(西川長夫訳「ナポレオンの生涯にかんする覚書」)

ナポレオンは1796年と99年の霧月18日に大革命を救った。やがて彼は大革命を滅ぼしはじめる。フランスの幸福にとって, ナポレオンは1805年の和平のあとで殺されたほうがよかったのだ。

(『ある旅行者の覚書』の余白に書かれたメモ[1840])

皇帝との個人的な関わりについては, 次のように年代順に回顧している。

わたしはボナパルト将軍がサン=ベルナール峠を越えた2日後に, 彼をはじめて見た。あれはバールの堡壘だった(1800年5月22日, ああ読者よ, 37年も昔のことだ!) マレngoの戦いの一週間か10日あと

で、わたしはスカラ座（ミラノの大劇場）の彼の後席へ入ることを許された。アローナの城砦の占領にかんしてとるべき処置を報告するためだ。わたしは1806年ナポレオンのベルリン入城に立ち会った。1812年にはモスクワ、1813年にはシレジアにいた。わたしはこれらすべての時期におけるナポレオンを見る機会をえた。この偉人は、クレムリンの閲兵式ではじめてわたしに言葉をかけてくれた。1813年の戦役において、わたしはシレジアでナポレオンと長い会話をかわす名誉をえた。最後は、1813年12月、わたしが元老院議員サン＝ヴァリエール伯爵とともにグルノーブルに派遣されたときで、ナポレオンみずから口頭でわたしにこまかい指図をあたえた。このようなわけで、わたしは良心にもとることなく数多くの嘘いつわりを嘲笑することができる。

（西川長夫訳「ナポレオンの生涯にかんする覚書」）

1806年10月14日か15日、ベールはイエナの戦いを見た、26日にはナポレオンのベルリン入城を見た。

（「自伝的ノート」5〔1837〕）

これらの告白は必ずしも事実と一致しない。自伝的覚書のあちこちに、「嘘をつかないこと」、あるいは「自分が見たことしか語りたくない」といった自戒の言葉を書きとめているにもかかわらず、彼はこの方針を守ってはいない。彼がマレンゴやイエナの戦いを見ていないことは容易に証明できる。皇帝から直接こまかい指示を受けたのが事実とすれば、彼の職務と地位に似合わない異例のことだ。不注意や記憶ちがいでありえないこれらの虚言をどう解釈すべきか。「長い会話を交わした」という一方で、「ナポレオンは私のような気違いには話しかけなかった」（『アンリ・ブリュラーの生涯』）とも書く。読者はどちらを信じたらよいのか迷う。スタンダール自身もこの矛盾と混乱に気づいていた。逸脱がすぎたと思うと彼は軌道修正を試みる。映画『太陽の少年』の主人公のように、おのれの過去を物語るものは誰でも、「誠実に話したつもりだが、いつのまにか嘘を語っていたのかもしれない」と思う瞬間がある。自己の心情に真摯であろうとすればするほど、スタンダール

は嘘に嫌気がさす。あらゆる説話行為につきまとうこの厄介な陥穽に彼は用心を怠らない。こうした謙虚で明敏な自己批判の姿勢は、大言壮語に反省のないシャトーブリアン、デュマ、ユゴーにたいする彼の嫌悪感と表裏をなすものと考えられる。

しかし、ことによると [中略]、知らず知らずのうちに、私も真実らしく見せようとしているのかもしれない。ところで、何よりもまず、私は真実そのものでありたいのだ。

(富永明夫訳『エゴチスムの回想』)

しかし、嘘をつかないためにはいかに多くの配慮が必要か！  
たとえば第一章のはじめに、法螺<sup>ほら</sup>と思われそうなのが一つある——  
じっさい、読者諸君、私は1809年、ワグラムで兵士ではなかったのだ。  
諸君に知っておいてもらわなければならないが、諸君より45年前には、ナポレオンのもとで兵士であったということが流行だった。だから今日、1835年においては、ワグラムで兵士であったということを、間接に、また絶対の嘘でなしに匂わせておくことは、まったく書いておくに値する嘘となるわけだ。

(桑原武夫・生島遼一訳『アンリ・ブリュラーの生涯』)

嘘をつく技術はこの数年来おそるべき進歩をしめした。嘘はもはや、わたしたちの父親の時代のように、あきらかにそれとわかる言葉では語られない。いまでは漠とした一般的な言い方によって嘘をつく。だからそれを嘘つきにむかって非難したり、とくに反証をあげて論駁しようとしてもむずかしい。

(「ナポレオンの生涯にかんする覚書(まえがき)」)

「絶対の嘘ではなしに匂わせておく」という1830年代の説話作法をスタンダールの炯眼はよく見抜いた。だがその嘘の価値を頭から否定してはいない。彼が幾度も皇帝を「見た」ことは疑いようもないが、その特権はもはや

有効な武器とはなりえない。親しく皇帝の訾訾に接した自分こそは真実のナポレオン像を語る適任者であると叫んでみたところで、軽蔑すべき嘘つきたちとどこが違うといえようか。スタンダールはそのことに気づいて苛立つ。蔓延する凡庸な嘘をいかにして凌駕するか。「真実そのものでありたい」スタンダールの嘘についての卓論は、事実の精確な記録でも「本当らしさ」の安易な捏造でもなく、偽りなきロマネスクの感動をいかに再現するかという文学の根源問題を提起している。

晩年の小説『パルムの僧院』(1839)は1796年5月のボナパルト将軍ミラノ入城で幕を開け、4年後のマレンゴの勝利に酔うミラノ市民の興奮を描いている(ベール自身の青春賛歌である)。皇帝のエルバ島脱出を知った16歳の若者ファブリス・デル・ドンゴは、ナポレオンに一目会って話そうという固い決意を抱いて家を飛び出す。パリに着くと毎朝チュイルリーの閱兵式を見に行くのだが、どうしても皇帝に近づけない。苦勞のすえにワーテルローにたどりつき、砲弾飛びかう戦場で指揮をとるネー元帥の姿に感激する。太股の切断手術を見て気分が悪くなり、ブランデーを飲んで朦朧となったとき、すぐ近くを皇帝が通りかかる。供の竜騎兵の長い飾り毛に邪魔されて顔は識別できない。「じゃあ、今そこを通られたのが皇帝なんですね」と悔しがるファブリスに隣の兵士は言う。「そうとも、刺繍のない軍服の人だ、なんだって君は見なかったのかい」。

戦場の真実とはこのように何がなんだかわからない混沌にちがいない。スタンダールは自身の体験したモスクワ(ボロディノ)やバウツェンの戦いではなく、空想のワーテルローに皇帝に惚れ込んだ純真無垢な青年を送りこんだ。しかし作者に似たこの主人公は憧れの英雄を見そこない、戦争の悲惨と兵士の卑劣さを目の当たりにして、幻滅と失望を持ち帰るのだ。確かに皇帝を「見た」スタンダールのこの奥床しさに私は爽やかな感動を覚える。

#### 参考文献

エッカーマン/山下肇訳『ゲーテとの対話』上中下(岩波書店1968)

ヴィニー/三木治訳『軍隊の服従と偉大』(岩波文庫 1953)  
 岡本明『ナポレオン体制への道』(ミネルヴァ書房 1992)  
 斎藤一郎訳『ゴンクール日記』(岩波書店 1995)  
 サント＝ブーヴ/土居寛之訳『月曜閑談』(富山房 1978)  
 鈴木杜幾子『ナポレオン伝説の形成—フランス十九世紀美術のもう一つの顔』(筑摩書房 1994)  
 鈴木杜幾子『画家ダヴィッド—革命の表現者から皇帝の首席画家へ』(晶文社 1991)  
 スタンダール/桑原武夫・生島遼一訳『アンリ・ブリュラルの生涯』[スタンダール全集 7] (人文書院 1968)  
 スタンダール/西川長夫訳『ナポレオンの生涯にかんする覚書』[スタンダール全集 11] (人文書院 1970)  
 スタンダール/鈴木昭一郎訳『日記』[スタンダール全集 12] (人文書院 1971)  
 スタンダール/富永明夫訳『エゴチスムの回想』(富山房 1977)  
 スタンダール/島田尚一・鳴岩宗三訳『リュシアン・ルーヴェン』[スタンダール全集 3/4] (人文書院 1969)  
 スタンダール/滝田文彦訳『パルムの僧院』(集英社世界文学全集 20 1981)  
 西川長夫『フランスの近代とボナパルティズム』(岩波書店 1984)  
 『ネルヴァル全集』第二巻, 第五巻 (筑摩書房 1997)  
 蓮實重彦『凡庸な芸術家の肖像—マクシム・デュ・カン論』上下 (筑摩書房 1995)  
 ロラン・バルト/花輪光訳『明るい部屋』(みすず書房 1985)  
 アルベルト・ビルショフスキ/高橋義孝・佐藤正樹訳『ゲーテ——その生涯と作品』(岩波書店 1996)  
 クーノ・フィッシャー/玉井茂・磯江景孜訳『ヘーゲルの生涯』(勁草書房 1971)  
 ヴァルター・ベンヤミン/浅井健二郎・久保哲司訳『ベンヤミン・コレクション・1 近代の意味』(筑摩書房 1995)  
 松浦寿輝『平面論—1880 年代西欧』(岩波書店 1994)  
 ミュッセ/小松清訳『世紀児の告白』上下 (岩波書店 1953)  
 本池立『ナポレオン 革命と戦争』(世界書院 1992)  
 横江文憲『ヨーロッパの写真史』(白水社 1997)  
 シモン・レイス/堀茂樹訳『ナポレオンの死』(東京創元社 1997)

Pierre BARBERIS, 《Napoléon: structures et signification d'un mythe littéraire》, *R.H.L.F.*, sept. -déc., 1970.

Roland BARTHES, *La chambre claire. Note sur la photographie*, Gallimard/Seuil, 1980.

Nicole CASANOVA, *Sainte-Beuve*, Mercure de France, 1995.

Maurice DESCOTES, *La légende de Napoléon et les écrivains français du XIX<sup>e</sup> siècle*, Minard, 1967.

Alexandre DUMAS, *Mes mémoires*, 2 vol., Laffont, 1989.

Alexandre DUMAS, *Les bords du Rhin*, Flammarion, 1991.

*Dictionnaire Dumas*, par R. Hamel et P. Méthé, Guérin littérature, 1990.

Victor HUGO, *Œuvres poétiques*, tome I(1964), tome II(1967), Ed. de la Pléiade, Gallimard.

Victor HUGO, *Œuvres complètes, Poésies II*, Laffont, 1985.



- Victor Hugo raconté par Adèle Hugo*, Plon, 1985.
- Georges LEFEBVRE, *Napoléon*, PUF, 1941.
- J. LUCAS-DUBRETON, *Le culte de Napoléon 1815-1848*, Albin Michel, 1960.
- Paul Michael LUTZELER, «The Image of Napoléon in European Romanticism», in *European Romanticism*, Edited by G. Hoffmeister, Wayne State Univ. Press, 1990.
- Bernard MENAGER, *Les Napoléon du peuple*, Aubier, 1988.
- Pierre MIQUEL, *Le Second Empire*, «Trésors de la photographie», Duponchelle, 1979.
- Alfred de MUSSET, *Œuvres complètes en prose*, Ed. de la Pléiade, Gallimard, 1960.
- Gérard de NERVAL, *Œuvres complètes*, tome I(1989), tome II(1984), tome III (1993), Ed. de la Pléiade, Gallimard.
- Poésies complètes de Sainte-Beuve*, Charpentier, 1910.
- SAINTE-BEUVE, *Portraits littéraires*, Ed. de Gérard Antoine, Laffont, 1993.
- SAINTE-BEUVE, *Correspondance générale*, Ed. Bonnerot, 19 vol., Stock/Didier, 1935-1983.
- Claude SCHOPP, *Alexandre Dumas*, Mazarine, 1985.
- STENDHAL, *Œuvres intimes*, tome I(1981), tome 2(1982), Ed. de la Pléiade, Gallimard.
- STENDHAL, *Romans et nouvelles*, tome 1(1985), tome II(1984), Ed. de la Pléiade, Gallimard.
- STENDHAL, *Vie de Napoléon, Œuvres complètes* (Champion), Nouv. éd., tome 39, Cercle du bibliophile, 1970.
- STENDHAL, *Mémoires sur Napoléon, Œuvres complètes* (Champion), Nouv. éd., tome 40, Cercle du bibliophile, 1970.
- Jean TULARD, *Napoléon ou le mythe du sauveur*, Fayard, 1987.
- Jean TULARD, *Napoléon. Le pouvoir, la nation, la légende*, Librairie Générale Française, 1997.
- Jean TULARD, *Dictionnaire Napoléon*, Fayard, 1989.
- Alfred de VIGNY, *Servitude et grandeur militaires*, in *Œuvres complètes*, tome II, Ed. de la Pléiade, Gallimard, 1948.
- Daniel ZIMMERMANN, *Alexandre Dumas le grand*, Julliard, 1993.
- L'Anti-Napoléon. Caricatures et satires du Consulat à l'Empire*, Musée de Malmaison, 1996.